

## 第七章 雲居雁の物語 夕霧の妻たちの物語

[第一段 雲居雁、実家へ帰る]

かくせめても見馴れ顔に作りたまふほど(このようにせめて数日は一条邸に留まって、宮と馴染んだ夫婦然とした体裁を大将が作っていらっしゃる間に)、三条殿(三条邸では夫人が)、「限りなめり(もう限界だ)」と(と言って)、

「さしもやはとこそ(まさかそんなことはないだろうと)、かつは頼みつれ(半信半疑だったが)、まめ人の心変はるは名残なくなむと聞きしは(堅物の浮気は遊びじゃ済まないというのは)、まことなりけり(本当だったんだ)」と、世を\*試みつる心地して(と大将が宮を本妻に迎えるという世評を確信した気になって)、 \*「ころむ」は<実験で理論の真偽を確かめる>。

「いかさまにしてこのなめげさを見じ(何でこのまま舐められていられるものか)」と思しければ(とお思いになったので)、大殿へ(おほいどのへ、実家の藤原殿邸に)、\*方違へむとて(その日の易で三条邸が凶角に当たるという口実で)、渡りたまひにけるを(お出掛けなさったのだが)、女御の里におはするほどなどに(姉上の弘徽殿女御が里帰りしていらっしゃった所だったので)、対面したまうて(御対面なさって)、すこしもの思ひはるけどころに思されて(少し気晴らしが出来たように思いなさって)、例のやうにも急ぎ渡りたまはず(いつものようには直ぐに三条邸にお帰りなさいません)。 \*「かたがへ」は<陰陽道(おんようどう)で、外出するときに天一神(なかがみ)・金神(こんじん)などのいる方角を凶として避け、前夜、他の方角で一泊してから目的地に行くこと。平安時代に盛んに行われた。たがえ。かたがへ。>と大辞泉にある。どうせ口実なので、詰めても埒の無い話だが、外出の方角が悪い、という、その元々の外出先は何処なのか。で、この際、最も大将を嫌がらせる筋を考えれば、三条邸から見て一条邸が其の日の大将の吉凶から見て凶角に当たるから、夫人の方で三条邸を出て、出発点が違う、という形にする。または、夫人の其の日の易が、一条邸から見て三条邸が凶角に当たる、とかだ。

大将殿も聞きたまひて(大将殿も夫人の里帰りをお聞きになって)、

「さればよ(やはりな)。いと急にもものしたまふ本性なり(本当に性急でいらっしゃる人だ)。この大臣もはた(また藤原大臣も)、おとなおとなしうのどめたるところ(年配者らしい落ち着いた所が)、さすがになく(意外に無いので)、いとひききりにはなやいたまへる人びとにて(藤原家では、もう一方的に事を騒ぎ立てる人たちがばかりになって)、めざまし(気に入らない)、見じ(会わない)、聞かじなど(話も聞かないなどと)、ひがひがしきことどもし出でたまうつべき(極端な話に成ってしまいかねない)」

と、驚かれたまうて(と動転なさって)、三条殿に渡りたまへれば(三条邸にお帰りなさると)、君たちも、片へは止まりたまへれば(お子様たちも半分は居残っていらっしゃって)、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける(女の子と幼子は夫人が連れ帰っていらっしゃったが)、見つけてよるこびむつれ(大将を見ては喜んで近寄り)、あるは上を恋ひたてまつりて(ある者は母上を恋しがりなさって)、愁へ泣きたまふを(悲しんでお泣きになるのを)、心苦しと思す(大将は気が重く感じます)。

消息たびたび聞こえて(大将は夫人に手紙を度々差し上げて)、迎へにたてまつれたまへど(迎への車を差し向けなさるが)、御返りだになし(お返事ありません)。かくかたくなしう軽々しの世やと(これほど頑なに聞き分けが無く家族や子供を顧みないとはあまりに軽々しい夫婦仲ではないかと)、ものしうおぼえたまへど(大将は夫人に嫌悪を覚えなされたが)、大臣の見聞きたまはむところもあれば(藤原殿のお考えもある手前、それなりの礼は尽くさないわけに行かないので)、暮らして(日暮れを待って)、みづから参りたまへり(自ら夫人を迎えに藤原殿邸に参上なさいました)。

## [第二段 夕霧、雲居雁の実家へ行く]

\*寝殿になむおはするとて(夫人は寝殿にいらっしゃるといふこと)、\*例の渡りたまふ方は(いつも夫人が里帰りでお使いになる部屋には)、御達のみさぶらふ(古女房たちだけが控えています)。若君たちぞ(お子様方は)、乳母に添ひておはしける(乳母と一緒に其処にいらっしゃいました)。\*「寝殿になむおはする」は注に<弘徽殿女御が里下りの時に用いる寝殿の部屋に雲居雁も一緒にいる。>とある。\*「例の渡りたまふ方」は注に<雲居雁が実家に帰った時に用いる部屋は女房たちがいる。>とある。

「\*今さらに若々しの御まじらひや(いい年をして娘気取りの御歓談ぶりですね)。\*注に<以下「もてなしたまふべくや」まで、夕霧の詞。女房を介して雲居雁に伝える。弘徽殿の女御と一緒にいることをさす。当時の若い女性は宮廷に仕える人からその有様や情報などを聞くのを喜んだ。>とある。一段に「すこしもの思ひはるけどころに思されて」とあったのも、同様の茶飲み話だったのだろう。「若い女性」が世情に敏感なのは、卵子の安全性を本能的に求めるから、「当時」に限らず<何時の世でも>変わらない。世情をどうするかに興味がある男は、世情がどうなのかを切実に見極めようとする女とは本性が違う。話にならない。

かかる人を、ここかしこに落としおきたまひて(子供たちをこの部屋や三条邸に置き去りにしなされて)、など寝殿の御まじらひは(どうして晴れの席で御歓談してられるんでしょう)。ふさはしからぬ御心の筋とは(母親らしからぬ奔放さとは)、年ごろ見知りたれど(ずっと思ってきましたが)、さるべきにや(それで良いものでしょうか)。

昔より心に離れがたう思ひきこえて(昔から忘れられない人とあなたをお慕い申して)、今はかく、\*くぐだしき人の数々あはれなるを(今はこのように小さくまとわる子供たちが何人も可愛くしているのを)、かたみに見捨つべきにやはと(お互いに見捨てられない同士だと)、頼みきこえける(頼りにしているのです)。はかなき一節に(ちょっとした行き違いで)、かうはもてなしたまふべくや(こういう為さりようはないでしょう) \*「くぐだし」は<わずらわしい、くどい>とあるが、「数々あはれなる」は<いろいろと可愛いくしている>だろうから、むしろ砕かれて<小さくて転がっている>という外形形容に取って置く。

と(と大将は)、いみじうあはめ恨み申したまへば(きつく咎めた非難を女房に取り次がせて夫人に申しなさると)、

「何ごとも(どうせ)、\*今はと見飽きたまひにける身なれば(いい年をしてとあなたが見飽きなされた私であってみれば)、今はた、直るべきにもあらぬを(落着きの無いのは今さら直るものでもない性質なので)、何かはとて(何を如何など、直す心算ありません)。\*あやしき人びとは(ま

とについてご迷惑な子供たちは)、思し捨てずは(お忘れなければ)、うれしうこそはあらめ(幸いです)」 \*「今はと」は大将の言った「今さらに」に反発している。そのかどかどしい語調のまま「今はた、直るべきにもあらぬを」と居直る威勢の良さ。この三条夫人の感性は奇妙なほど現代人に近い印象で、非常に生き生きとした臨場感がある。 \*「あやしき人びと」は注に<子供たちをいう。自分の生んだ子なので「あやしき」とへりくだって言う。夕霧の「くぐぐしき人」に対応した言い方。>とある。

と聞こえたまへり(と夫人は反論申しなさいました)。

「\*なだらかの御いらへや(減らず口の舌も滑らかなお返事ですね)。\*言ひもていけば(このまま言い争って行けば)、\*誰が名か惜しき(誰の名折れか、いや共倒れだ)」 \*「なだらか」は<かどかどしくない、なだらかだ、平穩だ、平坦だ、なめらかだ>みたいな言い方。よどみなく喋る一舌も滑らか一平坦一穩やか一かどかどしくない、という洒落。勿論、夫人の角々しい反論に対する皮肉、には違いない。 \*「言ひもていけば」は普通は<詰まるころは、結局は>という言い方らしいが、此处では<このまま言い合えば>だろう。 \*「たがなかをしき」の「か」は疑問か反語か。反語だろう。どちらの損になるのか、が疑問なら、大将としては夫人が不利だと思いたいだろうが、大将が有利だという根拠は無い。どちらも損しそうだ、というのが冷静な判断だ。だから大将は、深追いを避けた、のだろう。

とて(と言って大将は)、しひて渡りたまへともなくて(夫人に強いてお帰りをなさるようにとそれ以上には説得を重ねなさることもなくて)、その夜はひとり臥したまへり(その夜はそのままお休みなさいました)。

「あやしう中空なるころかな(まったく頼りないことになったもんだ)」と思ひつつ(と思ひながら)、君たちを前に臥せたまひて(大将はお子様方を横に寝かせなさって)、かしこにまた(一条の宮の方は)、いかに思し乱るらむさま(どんなに思い乱れていらっしゃることだろうかと)、思ひやりきこえ(案じ申して)、やすからぬ心尽くしなれば(落ち着かずに心配になるばかりなので)、「いかなる人、かうやうなることをかしうおぼゆるむ(誰がこんなことをしたがるもんか)」など、物懲りしぬべうおぼえたまふ(などと浮気に懲りてしまったような気がしなさいます)。

明けぬれば(夜が明けると)、

「人の見聞かむも若々しきを(言い争いは傍目にも大人気ないので)、限りとのたまひ果てば(どうしても離縁なさると仰るのなら)、さて試みむ(そうしてみましよう)。かしこなる人びとも(三条邸の方にいる子供たちも)、らうたげに\*恋ひきこゆめりしを(可愛らしくあなたを恋い慕い申しているようでしたが)、\*選り残したまへる、やうあらむとは見ながら(あなたの方はあの子たちは出来が悪いと選り残しなされたようだとは思いますが)、思ひ捨てがたきを(私は見捨てられませんので)、ともかくももてなしはべりなむ(何とか御世話いたします)」 \*「恋ひきこゆめりし」の目的語は<夫人>。明示補語する。 \*「えりのこし」は注に<『集成』は「出来の悪いのだけを残して行ったのだろうという嫌味」と注す。>とある。従って、左様明示補語する。

と(と大将が)、脅しきこえたまへば(最後通牒のように驚かせて夫人に突き付け申しなさると)、すがすがしき御心にて(大将は駆引きの無い御人柄なので)、この君達をさへや(此处にいらっし

やるお子様たちまで)、知らぬ所に率て渡したまはむ(知らない所へ連れ移してしまうお心算かと)、と危ふし(と夫人は危ぶむ)。

姫君を(大将は姫君のことを)、

「いざ、たまへかし(さあ此方にお出でなさい)。見たてまつりに(あなたにお会い申すために)、かく参り来ることもはしたなければ(このように私が此方へ参上いたすのも見苦しいので)、常にも参り来じ(普段は来れません)。かしこにも人びとのらうたきを(三条邸にも兄弟が可愛らしくしているので)、同じ所にてだに見たてまつらむ(向こうで一緒にお育て申しましよう)」

と聞こえたまふ(とお呼び出し申しなさいます)。まだいといはけなく(乳母に付き添われて大将がいらっしゃるお部屋にお出ましなされた姫君は、まだとても幼く)、をかしげにておはす(可愛らしくていらっしゃいます。)、いとあはれと見たてまつりたまひて(大将はとても愛しく思い申し上げなされて)、

「母君の御教へにな叶ひたまうそ(母君の御教えには従いなさいますな)。いと心憂く(本当に情けなく)、\*思ひとる方なき心あるは(ものの道理が分からない性分は)、いと悪しきわざなり(始末の悪いものです)」 \*「おもひとる」は<理解する。悟る。>と古語辞典にある。分別がつく、よりは、道理が分かる、ような語感。

と(と姫君に)、言ひ知らせたてまつりたまふ(言い聞かせ申しなさいます)。

[第三段 蔵人少将、落葉宮邸へ使者]

大臣(おとど、藤原殿は)、かかることを聞きたまひて(こうした経緯をお聞きになって)、人笑はれなるやうに思し嘆く(外聞の悪いことと思つて嘆きなさいます)。

「しばしは(夫婦にいざこざが有るからと言って、しばらくは)、さても\*見たまはで(そのまま様子を御覧になるということもなくて、)。おのづから思ふところ\*ものせらるらむものを(大将殿もそれなりにお考えのあることだろうに、)。\*女のかくひききりなるも(妻がこのように性急に里帰りすると言うのも)、かへりては軽くおぼゆるわざなり(却って軽はずみに見えるものだ)。\*「見たまはで」の主語は三条夫人。大臣の娘に対する敬語遣い。 \*「ものせらるらむ」の主語は大将殿。婿に対する軽い敬語遣い。 \*「女のかくひききりなる」は一般論だが、論旨は娘の行動を一般論に照らして評価しているので、敬語遣いが無くても全体を通す話題の焦点は同じなので、読点で繋いだ文構成に見て読んでも不都合はないかと思う。で、「ひききり」は<せっかち、性急さ、性急なさま>をいう形容動詞ナリ活用とあるが、「ひききりなる」の連体名詞は<性急な里帰り行動>を具体意する。それに以前には、もっと入り組んだ複数の人びとの主語からなる難文があったようにも思う。この文は偶々、細切れにしてもその文節毎に意味が立ったり、補語も分かり易かったりとかして、そういう読み方を提示しているのかも知れないが、論旨が一貫していれば通し文のほうが意味が取り易い、ということはあるのだろう。凡そ、論旨が単純でも、言い回しが複雑で分かり難い文、などというものは普通によく有って、実はその言い回しや語調などに情感や問題意識が示されていて、論旨などよりもその思いこそが主旨などということは、取り立てて言うまでもない日常茶飯事だ。尤も、そうは言うものの、必ずしも作者や発言者が、その意図の表現に成功しているとも限らない所は、確かに微妙で、岡目八目かもしれない。

よし(しかし、まあいいだろう)、かく言ひそめつとならば(こう言い出したからには)、何かは愚れて(何も臆して)、ふとしも帰りたまふ(早々にお帰りをなさることはない)。おのづから人のけしき心ばへは見えなむ(その内に亭主の動きでその考えが見えてくるだろう)」

と\*のたまはせて(と仰せになって)、\*この宮に(大将の結婚相手の一条の宮の方に)、\*蔵人少将の君を御使にてたてまつりたまふ(子息の蔵人少将を御使者に立てて結婚祝いを贈り申し上げます)。\*「のたまはせて」は注に<大臣に対する重い敬語表現。>とある。\*「この宮」は<この度の大将の結婚相手の宮様>という言い方だろうから、「たてまつる」は<結婚祝いを差し上げる>と読んで置く。ところで、一条の女二の宮は藤原殿から見て、早世した長男の嫁であった未亡人であり、その限りでは悲劇の人ではあるものの、幾分かは不吉な縁を感じさせる面もある。その女二の宮が今度は、自分の二女の婿と再婚して、災いをもたらしているようにも見える。宮は朱雀院の内親王であり、高貴な人には違いないが、どこか翳りを思わせる厭な印象が拭えない、のではないか。女遊びは男の甲斐性、というのが藤原殿の、個人的にも、また社会機構認識としても、基本的な考え方なのは間違いないので、大将を責める立場には情からも理からも立てないのだろう。ただ娘は不憫だ。つい、宮を責めなくなる。しかし、男の世話を受けなければ成り立たない宮の台所事情が大臣に分からない筈は無い。結婚の責任が男にある事は誰よりも良く承知しているだろう。まして、藤原殿が宮に働き掛ける圧力の重さにも、十分自負はあるだろう。今さら宮に当たるなど、ほとんど反則だ。\*「くらうどのせうしゃうのきみ」は注に<致仕太政大臣の子息、柏木の弟。>とある。それ以上の詳細は無いが、二郎君ではないのだろう。二君は一君衛門督亡き今や藤原左家の惣領なので、少将では位が低過ぎるように思う。因みに、二君は賢木卷六章三段に「中将の御子の、今年初めて殿上する、八つ、九つばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしびもてあそびたまふ。四の君腹の二郎なりけり」と印象深く登場していて、それが25年前の話なので今年で33、4歳になる筈だが、藤原一姫の弘徽殿女御が33歳であり、別腹ならともかく、同腹らしいので二君は34歳と見做すが、三君以下なら30歳前後になる計算で、29歳の源君に近いのだろう。なお、三条夫人は弘徽殿女御とは別腹の藤原二姫だが31歳。一条宮の女二の宮は推定だが26歳くらい。今や脇役の感だが、源氏殿50歳、藤原殿56歳、入道宮の女三の宮は24歳、朱雀院53歳、紫の上40歳。

「契りあれや 君を心に とどめおきて あはれと思ふ 恨めしと聞く (和歌 39-23)

「赤の他人じゃないだけに 厭な噂が気になります (意識 39-23)

\*注に<致仕太政大臣から故柏木の妻の落葉宮への贈歌。『完訳』は「「あはれ」は宮が長男柏木の妻だったから、「うらめし」は宮が娘雲居雁の夫を奪ったから。怒りを皮肉に言い込めた」と注す。『異本紫明抄』は「よそに我人々ごとを聞きしかばあはれとも思ふあな憂とも思ふ」(朝忠集)を指摘。>とある。「あはれと思ふ」ものの「恨めしと聞く」という藤原殿の心情は、言われなくても察している宮なのに、言われてしまえば尚更辛い。それが分からぬ藤原殿でもなかろうに、それでも言うか。今になって言うくらいなら、大将の宮への接近は分かっていたのだから、男の甲斐性はあるにしても、この宮だけは遠慮してくれ、と藤原殿は大将に申し入れるべきだった。娘の立場を思えば、天下の藤原家なのだから、王家は見合わせてくれ、せめて長男の嫁だった二の宮だけは止めてくれ、と言えない筈はない。が、言えなかった。藤原殿にしてみれば、二度も大将の恋路を邪魔立てするのは気が引ける、という負い目があったのかもしれない。だとすると、誰にとっても切ない話、ってことになるのかな。

なほ、\*え思し放たじ(どうか、決して一郎をお忘れ下さいますな)」 \*「え思し放たじ」は「契りあれや(縁有ればこそ)」の理屈からすれば<藤原家との縁>を忘れてくれるな、延いては、娘を傷付けている事を考慮

してくれ、が本音ではありそうだ。が、「なほえ思し放たじ」の言い方は<今でもよもやお忘れありますまい>という推察文で、意図としては下に<と願ひ奉る>がある丁寧な懇願口調だから、本来は<縁>のような概念にではなく、実際に情を交わした特定の相手に対する言い方で、その対象が肉親では無い義理の縁者なら、やはり先ずは夫や妻に向けられたものとするべきで、少なくとも表意では<亡き我が長子>を忘れてくれるな、と宮の身持ちの堅さに訴えているのだろう。しかし、はっきりと、姫が可哀相だから大将とは縁を切ってくれ、と的を絞った要求なら、応じるなり応じないなり、宮も自分の態度を決められるだろうが、死んだ人を引き合いに出した、その持って回った言い方は生活姿勢全般を縛るもので、具体的には応えようも無く、人を萎縮させるだけの意味しか持たず、しかもそんな意図も興味も藤原殿自身には毛頭ないという質の悪さだ。まったく、宮にとってはただただ重荷だ。

とある御文を(とある大臣の御手紙を)、少将持ておはして(故夫君の弟君である少将は携えなさって)、ただ入りに入りたまふ(勝手知ったるとばかりに、邸内を案内も待たずに寝殿に向かいなさいます)。

南面の簀子に\*円座さし出でて(しかし大将との新婚状態にある宮家としては藤原家の少将の君に対して、余所余所しく寝殿の南正面の縁側に丸御座を差し出して)、人びと、もの聞こえにくく(女房たちは応対に苦慮します)。宮は、ましてわびしと思す(宮はまして居た堪れない思いでいらっしやいます)。\*「円座」は「わらふだ」と読みがある。ワラなどで渦巻状に丸く作った敷物、とあり、「ゑんざ」ともいう、と古語辞典にある。注には此処の文意を<寝殿の南面の簀子。普通の応対待遇。接続助詞「て」逆接のニュアンス。>としてある。衛門督の存命中はこの君は主人の弟であり、宮も女房も身内者に対する態度で親しく接していたのだろうが、今や宮は源大将の妻であり、この藤原君は他家の客人として礼儀正しく迎えなければならない。また、この少将君にしても、他家を訪れる礼儀を弁えなければならない。まして、近衛少将なら上官に対する最上の礼を以て控えなければならない。が、本日のこの君は大臣の遣いであり、藤原家の君であり、三条夫人の兄弟であって、宮に物申す藤原殿の意向を体現する立場として、敢えて尊大に振舞う。面白い見せ場で、大変な緊張場面だ。多弁気味ながら、状況全般を明示補語する。

\*この君は、なかにいと容貌よく(この君は御兄弟の中でも特に顔立ちが良く)、めやすきさまにて(立派な態度で)、のどやかに見まはして(ゆっくりと庭を見回して)、いにしへを思ひ出でたるけしきなり(兄君の存命中の事を思い出しているようでした)。\*「この君」と敬意呼称しても敬語遣いは無い。親密ではないのだから、宮家の格式の高さを示しているのか、尊大さを難じているのか。何を表現しようとしているのか、よく分からない。

「参り馴れにたる心地して(私は此方に参り慣れている気がして)、うひうひしからぬに(改まった感じがしませんが)、さも御覧じ許さずやあらむ(此方では私をそのようにはお認め頂けないようですね)」

などばかりぞ\*かすめたまふ(などとばかりに少将の君は大将との結婚への皮肉を仄めかしなさいます)。\*「かすむ」は<かすかにそれとなく言う→ほのめかす>。「それとなく」は今の宮家が大将との結婚で<うひうひし>いのに「うひうひしからぬ」と言う皮肉。

御返りいと聞こえにくくて(宮は非常に藤原殿への御返事に窮して)、「われはさらにえ書くまじ(私にはやはりとても書けそうもない)」とのたまへば(と仰ると)、

「\*御心ざしも隔て(お祝い品も受け取らないというのは)、若々しきやうに(子供じみています)。\*宣旨書き、はた(代筆での御礼もまた)聞こえさすべきにやは(申し上げて良いような御方ではなく、失礼に当たる重鎮でいらっしやいます)」と(と女房たちが)、集りて聞こえさすれば(口を揃えて申し上げるので)、\*「みこころざし」は<藤原殿からの御祝い品>。やはり結婚祝いなのだろう。御息所の追善供養御見舞とかも思ったが、贈歌に「恨めしと聞く」とあったのは祝辞には見えないが、話題自体は<大将との結婚>には違いない。「へだつ」は<遮断する→受け付けない→応えない>。「隔て」は下二段活用の連用中止で<受け付けないというのは>。\*「宣旨書き」は<代筆>。

まづうち泣きて(宮は先ず泣き出して)、

「故上おはせましかば(亡き母上が生きていらっしやれば)、いかに心づきなし(この大将との結婚を何と不都合な)、と思しながらも(とお思いになりながらも)、罪を隠いたまはまし(朱雀院更衣の身を以て、私の不始末をお庇い下さったでしょうに)」

と思ひ出でたまふに(と母の慈愛を思い出しなさって)、涙のみつらきに先だつ心地して(涙ばかりが辛さを先に示すように溢れ出て)、書きやりたまはず(筆が取れなさいません)。

「何ゆゑか 世に数ならぬ 身ひとつを 憂しとも思ひ かなしとも聞く」(和歌 39-24)

「赤か黒かは別にして、私は白い心算です」(意識 39-24)

\*注に<落葉宮の返歌。『完訳』は「「数ならぬ身ひとつ」と、夕霧とは無関係に、一人を強調。下の句は、大臣の歌の下句に照応」と注す。『奥入』は「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」(古今集恋五、七四七、在原業平)を指摘。>とある。「数ならぬ身ひとつ」は的確な反論だし、何よりも本心だろう。ただ、「一人を強調」は<大将との無縁>を言っているのではない。というか、結婚実態があるのだから、そんな白々しいことは言えないし、言わない。といて、故夫君や藤原家との無縁、などを論いもしないだろう。心情としては、夫にも母にも先立たれた寂しい身の上であり、意識としても、小野山荘で女房たちや従兄妹の大和守に有無を言わずの勢いで迫られた、とは言え、一条帰参を受け入れた宮であってみれば、遅まきながらも、また、よろけながらも<自立心>を持ったのであり、いかに我を張るのが苦手な宮といえども、さすがにこの藤原殿の今さらながらの舅顔には、要らぬ差し出口は迷惑、と言って除けた、ようだ。

とのみ(とだけ宮は)、思しけるままに(実感なさったままに)、書きも\*とぢめたまはぬやうにて(書いたものの、御礼の挨拶も申し上げなさらずに)、おしつみつみて出だしたまうつ(包み紙で立て状にしてお出しなさってしまいました)。\*「綴ぢむ、閉ぢむ」は<体裁を整える、始末を着ける>で、御礼の挨拶も書かない、みたいなことかと思う。

少将は、人びと物語して(少将の君は女房たちに話しかけて)、

「時々さぶらふに(また時々伺いますが)、かかる御簾の前は(このような縁側では)、たづきなき心地しはべるを(他人行儀な気がしますので)、今よりはよすがある心地して(今後は身内の気安さで)、常に参るべし(気楽に参上申したい)。\*内外なども許されぬべき(御簾内への出入りも自由なようですから)、\*年ごろのしるし現はれはべる心地なむしはべる(私も忠勤に励んだ甲斐

があつてお近づき出来るものと嬉しく存じます)」 \*「内外(ないげ)」は注に<御簾の内側と外側、御簾の中への自由な出入りをいう。>とある。 \*「年ごろのしるし」は注に<『完訳』は「自分も夕霧同様にしばしば参上して忠勤に励んだので、同じように扱ってもらえそう。宮を好色の女と言わんばかりのいやみ」と注す。>とある。従う。藤原殿も宮の身持ちについて懸念を示していたので、この君を使者に立てる際にも、三条夫人への肩入れもあつて、それらしい話が出たのだろう。下文にも左様補語する。

など(などという脅しとも嫌味とも皮肉とも取れるような)、\*けしきばみおきて出でたまひぬ(凄みを利かせ置いてお帰りなさいました)。 \*「けしきばみおきて」という高圧姿勢は、さすがに遣り過ぎだ。一体、この君は大将殿の前でこんな無礼が働けるのか。否、絶対に出来ない。明らかに宮を女と見て舐めているのだ。宮と大将の結婚は藤原家にとって、延いては関係者各位にとって、大変な不都合ではあるが、「不都合」と「無礼」とでは、問題の大きさは左て置き、次元が違う。不都合は、折り合いをつけて解消するか、物理的に排除して払拭するか、しないではいられない問題意識で、その渦中の息苦しさは人をして決して安住を許さない重大懸念には違いない。物理的排除はざっくり言えば戦争だが、懸念の払拭という面では、これ以上に完璧な解決法は無い、というくらい爽快な代物で、人はその誘惑に間々抗し切れ無い。また、その勝負は生死を分けるという究極さなので、その競争も熾烈を極めるし、その結果に命懸けの開発で結実した技術や文化の福音も見逃せ無い。だがしかし一方で、戦争は必ず死の悲しみと膨大な経済損失も残すので、問題解決の完璧さも一時的だ。が、一時的とは言っても、何も私は怨念を信じるものではない。尤も、怨念を、懸案事象を引き起こした深層物理の例えだとするなら、それが別の事象を再度顕在化させる、という見方は成立するだろう。が、戦火によって現存物質の多様性をそのまま利用するという恩恵を自ら放棄し、結果として物質を炭素化して再利用するしかなくなる非効率さと、そのあまりに一面的なエネルギー変換反応による急激な環境変化は、人を含め地上生物に汚染状況をもたらす、という悲劇性の方が、何も核兵器の破壊力だけを言うまでもなく、今日では戦争を嫌う主な見識だ。というわけで、今日では懸案は協議で折り合い決着を図るべき物という認識が一般的なのだが、「無礼」は組織秩序自体に反するので、協議への参加資格自体が認められない。外事の国際問題なら、そも何が「無礼」なのか、とは即ち、「礼儀作法」や「儀礼様式」の統一見解を図るところから下話を始めるだろうが、内事にあつては「無礼」は即罷免に処される。この出来事は必ず大将の耳にはいるので、この君はこの宮邸に二度と参上しない、または、参上しない心算で、こう言い放つたのだろう。仮に、再参上があつても、本日はあくまでも藤原殿代なのであつて、君自身はこのような態度は二度と取れない。ところで、藤原氏の王家を蔑ろにした態度、というものは、この物語で何度も、それも相当に印象強く描かれている。葵の上と六条御息所の御車争いは特に強烈だが、元々桐壺帝の弘徽殿女御の羽振りの良さに始まって、光君を見下した右大臣家筋の人々の態度や、実際に光君を須磨退去に追い遣つた実力は、悪態といった形態に留まらず、政治実体を左右していた時代背景の生々しい動向を説明しているのだろう。不遜な態度を苦々しく描いているような作者自身も藤原氏だ。

#### [第四段 藤典侍、雲居雁を慰める]

いとどしく心よからぬ\*御けしき(こうした事が有つて、非常に悪化した宮の御機嫌に)、あくがれ\*惑ひたまふほど(大将が浮き足立って困つていらつしやる頃に)、\*大殿の君は(藤原殿邸に里帰りしている夫人は)、日ごろ経るままに(日を追う毎に)、思し嘆くことしげし(夫婦仲を思い嘆きなさるばかりです)。 \*「みけしき」は注に<落葉宮の機嫌。致仕太政大臣からの手紙によってますます不機嫌となる。>とある。 \*「惑ひたまふ」は注に<主語は夕霧。>とある。 \*「おほいどののきみ」は注に<雲居雁。大殿邸にいる女君のニュアンス。>とある。大体の感じは分かるような気がする文だが、やはり主語省略は不安だ。こうして注釈で確認して、やっとじっくりと文意を考えられる。



\*典侍(大将の愛妾の藤典侍は)、かかることを聞くに(こうした事情を聞き知って)、\*「典侍(ないしのすけ)」は注にく藤典侍。惟光の娘、「少女」巻に初出、「藤裏葉」「若菜下」巻にも登場。>とある。藤裏葉巻二章二段に大将との恋仲ぶりが描かれていたが、歌の贈答で心情は語られていたが、具体的な関係、暮らしぶり、通いの様子、とかいったことは明示がなく、私にはどうも手応えのある印象が無い。尤も、当時の宮廷読者にしてみれば、女官の所に忍び通う男やそれを手引きする女房たちの実態などは、あまりに日常で手に取るように分かり切った事、だったのかもしれない。ともあれ、それが11年前の話で、二人の馴れ初めは、それを遡ること6年前の、ということは今からは17年前の、少女巻六章二段の話に、藤原姫との仲を裂かれて傷心状態の学生源君が五節舞姫に選ばれた惟光の娘を見初めた、とあって、同巻四段には、源君は舞姫の弟を介して舞姫に恋文を贈った、とも語られていた。その舞姫の弟は源君と「同じ年なれど」(少女巻六章四段、惟光談)とあり、当時源君は12歳だったが、その時点で舞姫は典侍が内定していたようなので、乙女(をとめ、年少の女・処女)とは言え、宮仕えに足る15,6歳ではあったろうか、と見込んで置く。尤も、明石姫のように11歳で東宮に入内した幼な妻(藤裏葉巻二章三段)もいて、明石姫は12歳で懐妊(若菜上巻八章)、13歳の三月に無事初出産(若菜上巻十章)という早熟ぶり、それも数年ということなので、藤典侍も大将夫人(31歳)と同じ年くらいの若さだったのかもしれないが、源君(29歳)よりは年上である事は間違いなく、明示はないが、源君が夫人よりは典侍を大人扱いしている印象が私にはある。それは必ずしも年齢によるものではなく、夫人と源君が幼馴染だったり、育ちや物腰の違いなどから来る対応の違いなのかも知れないが、今のところは、藤典侍を源君の三歳上、夫人の一歳上の32歳と見て置く。

「われを世とともに許さぬものにのたまふなるに(私を自分の人生に関わりがある者とは認めないと仰って来たようだが)、かく\*あなづりにくきことも出で来にけるを(このように無視できない人が出てきてしまった訳だ)」 \*「あなづりにくきこと」とはく大将と宮との結婚>のことで、注には此処の文意をく『完訳』は「雲居雁は北の方とはいえ、皇女の身の宮を軽視できない。藤典侍の同情の裏には、今まで雲居雁に見下げられてきた恨みがこもる」と注す。>と指摘してある。確かに、この文意には夫人に対する反感があって、ざまあ見ろ、みたいな報復達成の優越感さえ漂う。そも「藤典侍の同情」といっても、夫人に寄り添って共感する、という<感性>は典侍には元々無いように見える。というか、そういう「感性」を安易にく優しさ>とかく思い遣り>と見做す考え方は、実は浅ましいものだ。典侍は、大臣家の娘を向こうに回して、そんな偉そうな立場に立てる身分などではない。逆に言えば、そんな風に同族支流に憐れみを持たれる事が、本流家姫の夫人には最も屈辱的な事で、本当に我慢できないことだろう。だから無論、典侍がそうした夫人の性格や心情を察して、敢えて突き放す、などということもなく、と言って愛想を作るべき主従関係でもないの、もし何か言うとしたら、素で言うしかなく、後は相手がそれをどう受け止めるか、受け止めないか、という間柄になるのだろう、いや、お互いに。で、凄く奇妙だが、この夫人と典侍の関係は、それなりに成立しているものなら、外形上は歴然と身分差はあるの、本人同士の意識としては殆んど水平の、現代の同級生にも似た共存相手、まったく飾らずに本音を言い合える仲での、自然体での素直な応酬、だったように見える。友人らしく楽しく付き合える友人、などでは決してないが、嫌でも理解できてしまう同僚、みたいな。いや、本当のところなど私には分からないが、下の歌の贈答を雑感した限りでは、そういう印象だ。

と思ひて(と大将夫人の立場の危うさを考えて)、文などは時々たてまつれば(手紙などは以前から時々差し上げていた仲なので)、聞こえたり(一言申し上げます)。

「数ならば身に知られまし世の憂さを、人のためにも濡らす袖かな」(和歌 39-25)

「たぶん気持は同じかと、あなたのためにも泣いてます」(意訳 39-25)

\*注に<藤典侍から雲居雁への贈歌。「身」は我が身、「人」はあなた雲居雁。『異本紫明抄』は「我が身には来にけるものを憂き事は人の上とも思ひけるかな」（小町集）を指摘。>とある。「人のためにも」の「も」は<私自身は当然ながら>と、夫人を自分と同列に並べて見る姿勢を示している。だから、「数ならば身に知られまし」は<私は大将の妻なので当然ですが、あなたもその数の内に入るなら、今度の大将の結婚が身に詰まされましようから>とあって、「世の憂さを人のためにも濡らす袖かな」で<その憂さをあなたのためにも嘆いています>と、「われを世とともに許さぬものにのたまふなる」正妻の夫人に臆面も無く言い放っている。妾の分際で不遜な、とも思えるが、遠慮が無い無邪気さだけに、却って嫌味や皮肉めく腹黒い当て付けでは無い、率直な同情が伝わる、のかもしれない。いい年をして立場を弁えない非常識な歌詠みだ、という見方をしたら、とても信じられない内容で、だから逆に、この二人は、そういう世間の常識に捉われない自由人同士と言うか、純粹と言うか、ガキと言うか、珍しい仲だったように見える。

\*なまけやけしとは見たまへど(夫人は典侍の言い種を生意気だとお思いになったが)、もののあはれなるほどのつれづれに(無常の世に感じ入っている時の気紛れに)、「かれもいとただにはおぼえじ(あの子も苦勞してきたのかしらね)」と思す\*片心ぞ、つきにける(とお思いになる気も少しは起きました)。 \*「なまけやけし」は<なまじ際立っている→妙に気に障る→生意気だ>。 \*「かたごころ」は<少しの関心>と古語辞典にある。

「人の世の憂きをあはれと見しかども、身にかへむとは思はざりしを」(和歌 39-26)

「人の不幸を目にしても、自分は無いとってた」(意識 39-26)

\*注に<雲居雁の返歌。「身」「世」「憂」「人」の語句を用いて返す。『集成』は「よく同情して下さいました、の意」と注す。>とある。いや、この二人に世間体を繕う挨拶は不要で、文字通りに、夫人は本当に自分がこういう目に遭うとは思っていなかったのだろう。この歌こそ、「我が身には来にけるものを憂き事は人の上とも思ひけるかな」を下敷きにしてしている。下に「思しけるまま」とあるが、確かに全く単なる感想文で、歌といえるほどのものか、とさえ思える。典侍の歌も音数合わせで、この歌の贈答に、特に見るべき詠み方の妙みみたいなものは、私には見当たらない。それでも作者がこういう場面を描いた意図は、こういう奔放な歌を詠み交わしている女たちがいる風景の、その情緒に可笑しさを感じていたからじゃないか、と思う。

とのみあるを(とだけの御返歌があったのを)、思しけるままと(お考えのままの感想文だと)、\*あはれに見る(典侍はその率直さに事態の真相を感じます)。 \*「あはれに見る」は冗句や皮肉ではなく、と言って、憐れむという意味での<同情する>でもないだろう。「あはれに」の「に」は<~なもの>という典侍の思考を示し、夫人に対する思いではなく、事態に対する見方だから<みたてまつる>ではなく<見る>となるのではないか。何だか、こじつけ気味だが。

\*この、昔、\*御中絶えのほどには(この大将夫妻が昔、途中で行き来が絶えていた時には)、\*この内侍のみこそ(この内侍所仕えの女官だけを)、\*人知れぬものに思ひとめたまへりしか(大将は本気の相手に思っつけ合っていたが)、こと改めて後は(改めて夫人との結婚が叶ってからは)、いとたまさかに(とても多く問の空いた通いで)、つれなくなりまさりたまうつつ(疎遠になりがちでいらしたものの)、さすがに君達はあまたになりけり(それなりにお子様方は大勢になっていました)。 \*「この昔」の「この」の「こ」が代名しているのは、今の場の主要話題の、本来の、

という意味での「当」であり、「この」は「この大将夫妻が」という言い方。\*「おんなかだえのほど」は注に「夕霧と雲居雁の仲が父大臣によって妨げられていた間、「少女」巻から「藤裏葉」巻で結婚するまで、六年間あった。」とある。\*「このないし」の「この」「こ」が代名しているのは、今の話で話題に取り上げる所の、手近な、という意味での「当」。\*「人知れぬもの」は「本気の相手」。親も承知している公然の仲なので「隠れた愛人」ではないだろう。むしろ、本気じゃない女遊びは他に多くあった、ことを言外に知らず言い方に見える。

この御腹には(大将殿のお子様方は、この本妻腹には)、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四の君、五の君とおはす(長男、三男、五男、六男、次女、四女、五女、の七人がいらっしやいます)。内侍は(典侍腹には)、大君、三の君、六の君、次郎君、四郎君とぞおはしける(長女、三女、六女、次男、四男、の五人がいらっしやいます)。\*すべて十二人が中に(全十二人の中に)、かたほなるなく(出来の悪い者はなく)、いとをかしげに(とても可愛らしく)、とりどりに生ひ出でたまける(それぞれに成長なさってらっしやいました)。\*「すべて十二人」という明示も初めてだし、各自それぞれの母腹ごとに整理された説明もかつて無い。この物語では珍しい記述であり、よほどの絞られた実在対象を感じさせるもので、この説明で男女それぞれの上下順位は分かるが、全体を通しての年齢順までは分からない。

内侍腹の君達しもなむ(ないしばらのきんだちしもなむ、典侍腹のお子様方は特に)、容貌をかしう(顔立ちが良く)、心ばせかどありて(頭も利れて)、皆すぐれたりける(皆優れていました)。三の君、次郎君は、東の御殿にぞ、取り分きてかしづきたてまつりたまふ(三女と次男のお子様は大将の実家に当たる六条院東町の寝殿で上である花散里が特別に引き取って大事に御育て申しなさいます)。院も見馴れたまうて、いとらうたくしたまふ(六条院源氏殿もその子たちを日頃見慣れなさって、とても可愛がっていらっしやいます)。

\*この御仲らひのこと(この六条院でのお子様方の生活は)、言ひやるかたなく(親たちの喧騒ぶりを他所に、何の問題も無く良好だった)、とぞ(とか)。\*「この御仲らひ」の「この」は何を指すのか。「なからひ(中らひ、仲らひ)」は「人と人との関係や間柄。」または「一族。血統。」と大辞林にあり、その対象体も曖昧なので、尚更絞り難い。が、それでも「仲らひ(睦み合うさま)」という言い方は、大将家や宮家や典侍などを含めた「複雑な事情」や「仲の悪さ」みたいなことを示すものではなさそうで、お子様たち同士の仲のよさ、または、その生活の良好さ、あたりのことを言っていそうな気はする。しかし、であれば、むしろその具体描写を示して微笑ましい一文を提供して良さそうなものだ。それが、「言ひやるかたなし(非常に良好)」の一言で済ませる、というのは全体の動向などの様子を示している訳で、となると、話運びからしても、「この御」は「この六条院での」を意味して、「とぞ」が「親たちの軋轢を他所に」みたいな語調にも見えてくる。もう、そうやってしまうが、「言ひやるかたなく(嫌に成るくらい)」分かり難い。

(2012年10月26日、読了)